

# 「アイヌ民族総合調査」と戦後日本の文化人類学

## ——泉靖一の「挫折」をめぐる覚え書き——

“The General Research on the Ainu” and Cultural Anthropology in Postwar Japan

A Memorandum of Izumi Seiichi’s “Frustration”

木名瀬 高嗣

KINASE Takashi

### 1. 序

ここで取り上げるのは、「アイヌ民族総合調査」と呼ばれた1950年代の北海道でのアイヌ調査に関連した事柄である（以下、「総合調査」と略す）。現在筆者は、この「総合調査」を中心とした時期のアイヌに関する人類学的研究において提示された理論的なモデルについて再検討を進めている。

この調査による「成果」としてしばしば言及されるのは、日本風の「ミンゾク学」（民族学／民俗学）という語よりは、むしろ英米流の「文化人類学」「社会人類学」という語で表現される方が相応しいような、当時まだ新しかった統合論的あるいは機能主義的な社会理論のパーспекティヴをアイヌ研究という領域に持ち込んだことである。とりわけその中核を担ったのは、泉靖一と杉浦健一という、戦後の東京大学文化人類学教室の草創期を担った2人の人類学者であった。1952年3月刊行の『民族学研究』16巻3・4号（合併号）にまとめられた「さるアイヌ共同調査報告」のなかで、2人はそれぞれ研究論文を発表している<sup>(1)</sup>。しかし後述するように、それらはいわば未完の企図にとどまるものであった。そしてその後、彼らの研究が提示した社会組織のモデルがこの学問領域の内部で批判的な再検討の対象として顧みられることは、とくに彼らの死後はあまりなかったと言ってよいだろう。

本稿ではいささか不十分ながら、とくに「綜

合調査」のなかで泉靖一が果たした役割について焦点を当て、この時代になされたアイヌに関する社会人類学的な諸研究について批判的考察を進めていくための端緒としたい。とくに泉に焦点を当てる理由は、杉浦が論文を執筆した親族組織の問題も含めて、このときの社会人類学的なテーマに関する調査が「泉に始まり、泉に終わった」ものであると考えられるからである。

### 2. 「アイヌ民族総合調査」の研究組織と「成果」

#### 1) 人文社会科学と自然科学との「総合」

「アイヌ民族総合調査」は、1950年度から文部省の民間研究機関助成金、科学研究費交付金のほか、国策パルプ、苫小牧製紙、本州製紙など、北海道日高地方の林業と深い関係のある製紙業界からの寄付金を得て企画された。同年8月刊行の『民族学研究』15巻1号に「学会消息」として掲載されている「アイヌ民族総合調査の計画」では、この調査の目的が以下のように記されている。

アイヌ民族については、従来幾多貴重な調査研究が行われて来たが遺憾ながら、未だアイヌ民族の人種の民族的系統、アイヌ民族固有文化の本質は十分に解明されたとはいえない。（中略）人類史における一つのミッシング・リンクとして、新旧大陸の人種的文化的交流の問題として、またアイヌ民族と日本民

族との関係の問題として内外人類学民族学界の大きな関心の的となっている。(中略) 一方混血或は異文化との接触混淆に依って、アイヌ民族固有文化は急速に消滅しつつあるのであつて、速やかに人類学的民族学的総合調査を遂行しないならば、遂に永遠にアイヌ文化の究明は不可能となるかも知れない。また他方純粋アイヌ民族の人口は減退の傾向を示し文化的、社会的経済的条件も決して恵まれたものとはいえない。アイヌの福祉政策のためにも、その基礎的資料として急速かつ広汎な社会人類学的調査研究の必要が痛感されている<sup>(2)</sup>。

「人種的民族的系統」と「固有文化の本質」というアイヌ民族の過去の様態が、「混血」および「異文化との接触混淆」によって研究遂行の危機に瀕していると認識されていたこと。また、和人との通婚混血と文化変容とが密接に関わると捉えられたことから、こうしたテーマにアプローチするために人文社会科学(文化人類学あるいはミンゾク学)と自然科学(形質人類学)との協働が前提とされていたこと。さらには、これらの成果が(「福祉政策」などの)同時代的な課題に取り組むための基礎資料にもなり得ると位置付けられていたこと。以上の事柄を確認しておけば、さしあたりここでは十分だろう。

「総合調査」の具体的な実施は、1951年3月、小山隆と鈴木二郎による日高地方沙流郡平取村(現・平取町)におけるアイヌの家系調査から始まった<sup>(3)</sup>。これに続いて泉が同年5月下旬から6月初めにかけて同村で社会人類学的な予備調査を行い、「これまでの研究でどうもはっきりしていない親族の構造と、場所請負人時代以来の境界争いから予想できる領域占有——つまりホルドとかバンドといわれる小集団とそのテリトリーの関係」からアイヌの社会構造を明らかにしようとした<sup>(4)</sup>。それを承けて8月に沙流川流域を中心に共同調査が実施された。この共同調査に基づく前述の「沙流アイヌ共同調査報告」は、その後も継続される「総合

調査」のなかで、結果的にほぼ唯一の集約的成果となった。

この報告の最初に付された総論的な文のなかで石田英一郎が述べるところによれば、調査の構成メンバーは「文化人類学」「形質人類学」そして「北海道諸学者」の三者から成り、「沙流アイヌ共同調査報告」はそのうちの前二者による成果であるとされる<sup>(5)</sup>。その両者共通の基礎データとなったのが、詳細な家系図(「沙流川アイヌの系圖」)である。これを完成させたのは、須田昭義、島五郎ら形質人類学者たちのグループである。調査対象となったのは、平取村のうち二風谷・ペナコリ・荷負本村・貫気別の4地区で、二風谷では小山・鈴木による戸籍調査を、ペナコリ・荷負本村では巡査駐在所の名簿を元に、それぞれ現地の古老男性インフォーマントから口述で得た情報を加えて(貫気別では口述のみによって)作成された。いずれも平取村平取(現在の平取町本町)地区よりも上流に位置する集落であり、その意味では(市街化が進んだ場所に比べて)より「純粋アイヌ」が多いと想定される地域であった。「純アイヌと称されているもの」を四角、「純和人」を二重四角で囲み、さらに「程度の如何に係らず混血の明らかなるもの」には傍線を付し、「系図を辿って明瞭に推定できるもの」については傍線を略した上で、生年月日・死亡年月日についても戸籍・駐在所名簿を参照して記入された。結果としてこれは、アイヌの「純血」「混血」について例を見ない集中的な家系調査となった。須田はこの調査から「混血の者が多く従って純血アイヌは非常に少ない」と結論づけている<sup>(6)</sup>。

こうした情報は、形質人類学者たちによる遺伝的な調査の基礎になったと同時に、「アイヌ古来の社会構造、ことに親族組織の復原のためにも、大きな手がかりとなるばかりでなく、その解体過程の現実の姿を立証するためのデータとしても価値が高い」とされ、文化人類学と形質人類学との間を架橋する資料として位置付けられた<sup>(7)</sup>。

## 2) 社会人類学的な「発見」

このとき「復原」が試みられた「アイヌ古来の社会構造」とは、予備調査において泉が「発見」して持ち帰った「重要な二つの問題」、すなわち、「イウォロ (iwor)」という領域概念と、女の「ウッソロ (upsor)」を中心とした外婚規制を含む親族組織を指す<sup>(8)</sup>。

ここではその両方に共通する男女両性の系譜に関連した論点に絞って述べる。イウォロとは、狩猟採集を生業基盤とした時代のアイヌ社会において単位的な地縁集団が占有する領域概念であるとされ、同じイトッパ (itokpa: 木幣(イノウ)などに刻まれる祖印)を受け継ぐ父系の男子によって(つまり祖父から父、父から息子へ)辿られる系譜=エカシイキリ (ekasi ikir)を基礎とした集合体としてのコタン (kotan)をその担い手とするものであったとされた。またウッソロは、女性が衣服の下に着ける細紐で、それを夫以外の人間に見せることはもちろん、それについて語ることも自体にも憚りがあると言われるほどタブーに満ちたものとされていた。アイヌ語では同じイトッパを持つ男たちをシネイトッパ、同じウッソロを持つ女たちをシネウッソロと表現する。つまり、イトッパが父系の系統を示すものであったのに対し、ウッソロは母系の女子(つまり祖母から母、母から娘へ)によって継承される系譜=フチイキリ (huci ikir)を象徴するものであった。

このような男女両系統の存在については、「総合調査」に先行する研究のなかですでに指摘されていた事実である<sup>(9)</sup>。その上で一連の「総合調査」において目指されたのは、当時のアイヌが置かれた実態からはすでに大きくかけ離れたこれらの事柄について、社会人類学的な理論(とりわけ出自集団をめぐるそれ)と関連づけてアイヌ社会に「固有」の構造と機能を再構成することであった。

泉の予備調査を承けて親族組織に関する理論的考察を主に担当したのは、杉浦健一である。アイヌ社会の親族関係は、父系・母系両方を識別するという点で双系出自的な性格を有すると

言われることがある。しかし、一般に双系出自とは同一人が父母両方の系統を辿る関係を指すのに対し、アイヌにおいては、父系系統は男性だけ、母系系統は女性だけが辿るという点に特徴がある。この場合の両系統は男女別々に排他的に構成されるという点で、両性を含んで成り立つ出自集団とは見なし難い<sup>(10)</sup>。杉浦は、エカシイキリ、フチイキリともに「特異なもので、unilateralな親族構成であるといっても、lineageやclanと同一視することはできないものである」<sup>(11)</sup>とした上で、エカシイキリに基づく外婚規制がないのに対し、母同士が同じフチイキリに属する男女は結婚禁忌の対象となる(イトコ婚規制の形式からみれば、母方平行イトコ婚が忌避されることになる)ことなどから、母系系統の方に(表面的には「微弱」であると述べつつも)リネージとしての機能的側面が見出せるとした。この点は、父系系統を強調する傾向のあったそれまでの「北海道諸学者」たちによる諸研究とは大きく異なる<sup>(12)</sup>。

1951年の「沙流アイヌ共同調査」の後も、「総合調査」の事業は継続された。1952年春に胃潰瘍と診断され闘病生活に明け暮れていた杉浦は、1953年春には夫人を伴って祖父江孝男、蒲生正男、梅原達治とともに日高・胆振で、また同年夏には「第8回日本人類学会・日本民族学協会連合大会」の前後に日高・胆振と十勝での調査を実施している(十勝での調査には泉も同行している)<sup>(13)</sup>。連合大会の「アイヌ問題シンポジウム」では、杉浦が「アイヌの社会組織」についての講演を担当し<sup>(14)</sup>、ラドクリフ・ブラウンの「兄弟姉妹同一の原理」を参照するなど、男女の別系統についての説明により機能主義的な傾向を強めている。とはいえ、「世界でも稀にみる型」であるとして提示されたモデルそのものは「沙流アイヌ共同調査報告」の枠を超え出でおらず、なお仮説的な段階にとどまるものであった<sup>(15)</sup>。

社会組織に関するアイヌ研究がその後深化しなかったのは、アイヌ「固有」の社会がその時点ではほとんど跡形なきまでに解体してしまっ

ていたからだ、などとしばしば言われる。ここで「固有」の社会組織と呼ばれるものは、機能論あるいは構造論的な調査法を前提とした本質主義的仮構にほかならない。そもそも過去のアイヌの社会にリネージの如き集団が存在したか否かについてすら明らかではない。このとき杉浦が模索したのは、数少ない古老への聞き取りから得られた断片的な知見を頼りに過去の親族体系を復元することに加えて、それ自体を歴史的な変容の結果として捉え、さらに以前の過去の時代に遡って存在した可能性のある（より「純粹」な）父系ないし母系の出自集団を別出することであった。親族組織の共時的な構造・機能とその通時的な動態とを併せて問うという方法は、杉浦自身が経験した戦時期マイクロネシアにおける社会組織研究と共通した枠組みの下にある<sup>(16)</sup>。このような方法は、民族誌的研究を単に個別社会の記述的な理解としてだけでなく、「lineage や clan の如き unilateral な血統をもって団結する社会集団の起源」という「未開社会の研究の当初以来の」理論的な課題にも資するものとして位置付ける視座に基づいていたが<sup>(17)</sup>、この時代のアイヌが置かれた状況に鑑みれば、そのような研究は二重の困難さ（あるいは不可能性）を招来するものであったと言べきだろう。

しかしその杉浦は、1954年1月に急逝した。その後「総合調査」は1954年度をもって途絶するが、杉浦という理論的な支柱を失ったからという面は否めない。これが社会人類学的なアイヌの親族組織研究としては他に類を見ないものであったことには違いなかったが、それが留保付きの議論に過ぎないという事実が半ば忘却されて今日に至っている<sup>(18)</sup>。

### 3) 「北海道諸学者」と

#### 「ネイティブ・インフォーマント」

（北海道大学を中心とした）「北海道諸学者」の分担した調査について、石田はただ「速やかにその報告の発表されるのを待っている」と述べるのみである<sup>(19)</sup>。この文言からは、中央と

北海道の研究者の間の冷ややかな関係がうかがわれるが、この関係は、さらに「文化人類学」「形質人類学」「北海道諸学者」の諸カテゴリーの外側（あるいはこれら諸カテゴリーと研究対象たるアイヌとの中間）に、研究者たちに情報を提供したアイヌ側の「ネイティブ・インフォーマント」というもう一つの媒介項を置いてみたときにより明確になる。アイヌ「固有」の社会が大きく変容していたとされる時点において、しかもそれまでアイヌ研究に直接従事してきたわけではない研究者たちによってこのような調査が成立したのは、研究者たちにとって有用な知識をある程度系統的な形に整理して提示した彼（女）ら「ネイティブ・インフォーマント」たちの協力があつたからこそである。そしてこの研究者と「ネイティブ・インフォーマント」とのそれに相似した関係は、研究者組織の内部に目を移してみたときに、中央の学者たちと「北海道諸学者」たちとの間にもまた見出すことができる。

「文化人類学」（あるいは「ミンゾク学」）領域における理論的・方法的な面から見れば、この関係は、戦後になって急速に流入した（構造機能主義や「文化とパーソナリティ」論など）アメリカあるいはイギリスを主な発信拠点とする新しい理論枠の影響を強く受けるようになっていた中央の「文化人類学」に拠る者たち（この調査においてその中核を担ったのが泉と杉浦であるが、歴史民族学の影響が強い石田や岡正雄も「総合調査」にはこの立場で参加していると見てよいだろう）と、旧来からの素朴で記述的な方法に基づく個別民族誌の研究にとどまる者たち（理論上は学際的・包括的でカテゴリー化の難しいこれらアイヌ研究の属する領域を、あえて「文化人類学」と区別する意味で「ミンゾク学」と呼んでおく）との関係であると言い換えてもよいだろう。「北海道諸学者」と括られた者の多くは（少なくとも前者から見て）後者に位置付けられていたと考えられるが、実際にこの層に位置付けられる「ミンゾク学」的なアイヌ研究者は北海道内外の双方の学界に分布したと言すべきで

ある。清水昭俊は、金田一京助の薫陶を受け「総合調査」の当時は東京学芸大学教授であった久保寺逸彦にこのような位置付けを与えているが<sup>(20)</sup>、確かに、「文化人類学者」たちによる理論的な構築の基礎となるべき民族誌的情報をしばしば提供したのは、アイヌ調査において彼らよりも先行しアイヌ語にも通暁していて、「ネイティヴ・インフォーマント」たちともより密接な関係のもとで多くの情報を得ることのできた久保寺のような「ミンゾク学者」たちであった<sup>(21)</sup>。

理論研究の中央に位置する（と自認する）「文化人類学」の研究者集団が、「北海道諸学者」と一括された「ミンゾク学者」、そして調査地に住むアイヌの「ネイティヴ・インフォーマント」という周辺化された二重のエージェントを媒介としてアイヌを〈知〉的に搾取・収奪する、という構造。「総合調査」の中心的な成果とされる社会組織に関する理論が作り上げられたのは、このような知をめぐる覇権の関係の下においてである。そしてすでに述べたように、そのような「理論」は結局のところ実を結んでいない。

### 3. 泉靖一の調査

#### 1) 平取村における予備調査 (1951年5~6月)

上述の如き図式的な整理は、「総合調査」のなかでもとりわけその成果が論文としてまとめられている「沙流アイヌ共同調査」を中心に、あくまでも活字に書かれたもののみから概括した場合の話である。当然のことながら、論文には実際にフィールドでなされた調査のすべてが書き記されているわけではない。個々の研究者たちの（人間関係を含む）調査活動がすべてそのようなポリテクスから理解すべきでものであったかと言えば、必ずしもそうではないだろう。

次に言及したいのは、泉が平取村で行った最初の予備調査である。このときの様子は、国立民族学博物館所蔵の泉靖一アーカイブに含まれるフィールドノートに記されている<sup>(22)</sup>。以下、断片的ではあるが、日記調に書き綴られた

ノートからわかることをいくつか指摘しておく。

この予備調査で泉は、社会構造を明らかにする上で基礎となる系譜や婚姻の話聞き出すために女性がいた方が有利だという考えから、貴美子夫人を同伴していた。5月24日、当時住んでいた登戸を朝一番の電車を出た夫妻は、上野から青森・函館を経て翌25日札幌に到着した。着いた当日に、泉は北海道大学に赴き同大教授の高倉新一郎を訪ねるが、学生部長の職で多忙な高倉とのその日の話は「立話し5分で」終え、翌26日に改めて北大で高倉と打ち合わせを行った。高倉からは、「総合調査」に交付された）科学研究費のうち60,000円を任意に使わせてもらいたいことと、北海道側としてはアイヌの「民俗学的取扱い」について「郷土史編纂の一部」として位置付けたい旨が伝えられ、その一方で「東京側の援助」については高倉が担当しその費用も高倉が準備することが約された。このとき泉は、アイヌの狩猟・漁業権についても話をし、高倉から論文の抜刷を貰っている。また28日にも泉は北大を再訪、このときは名取武光（当時教養部で人類学を講じていた）からアイヌの捕鯨に関する論考を貰い受けている。高倉と名取は、ともにその後の社会組織（領域概念、親族組織の両方）に関する研究の重要な先行研究者である<sup>(23)</sup>。

ここで親族組織について話をしたらしい記述がないことから、泉の関心が第一に狩猟・漁撈に関連した領域の方であったらしいことがうかがえる。のちに「沙流アイヌ共同調査報告」における論文の註で、「同一河川の流域の住民が、強い同類意識によって結合し、河川名を以て自己呼称とし、生活諸様式を共通にしている周辺民族に北方ツングースの一部がある」として、シロコゴロフ『北方ツングースの社会構成』および泉自身の論文「大興安嶺東南部オロチョン族踏査報告」（『民族学研究』3巻1号、1937年1月）に言及していることを踏まえれば、泉は自身による戦前期の大陸における研究の延長上にこのアイヌ調査を位置付け、それと類似の構造をアイヌの社会にも見出せることを

期待していた、ということになる<sup>(24)</sup>。この点、杉浦の場合のミクロネシアにおける研究とアイヌ調査との関係に相似する。

泉はこのアイヌ調査以前にも、樺戸郡新十津川村（現・新十津川町）で本州からの開拓移民の調査を行っているが（1949年）、彼の北海道に対する関心は、泉家もまた北海道の開拓者であったことと無関係ではない。泉の父方の祖父・麟太郎は、1842年に仙台藩支藩の角田藩士として生まれ、明治維新後は北海道に入植、のち夕張郡角田村（現・栗山町角田）で村長、さらには北海道会議員をも務めた<sup>(25)</sup>。札幌駅に到着した泉夫妻を出迎えたのは、麟太郎の長女で泉の叔母（泉の父・哲の妹）にあたる櫻庭喜雨であった。この当時、喜雨の夫で大正期に角田村の収入役と助役を務めた櫻庭東は札幌市に転じており、角田の泉邸にはもう一人の叔母・子十四が住んでいた。泉夫妻は平取での調査に入る前に、札幌の櫻庭家と角田の泉家の両方に滞在している。

29日、泉夫妻は朝に札幌を発ち、苫小牧、富川で鉄道を乗り継いで13時に平取に到着した。彼は貴美子夫人を旅館に残し、平佐武美村長と面会するために平取村役場を訪ねる。平佐は札幌市助役を経て1948年7月の選挙で平取村村長に当選した人物であるが、この平佐への紹介の労を執ったのは、櫻庭東であった。平佐は調査への協力を約束し、二風谷出身のアイヌで長く平取村役場に勤め戸籍事務に精通した二谷文次郎を呼んで泉に紹介した<sup>(26)</sup>。文次郎は、翌日二風谷の二谷国松を訪ねるよう泉に勧めた。泉はまた文次郎から漁業区域と狩猟区域について聞き、これに対し文次郎は明快に説明したため「両区域があることは判明した」という。旅館へ戻ってから、泉は文次郎の話に基づく地域区分の図を夫人に書かせている。

翌30日から6月1日までの3日間、泉は二風谷の二谷国松（30日と1日）、ペナコリの川上サノウク（31日）の宅を訪問、さらには平取市街外れに住んでいた鍋澤トヨ（31日）を旅館に招いて話を聞いた<sup>(27)</sup>。彼（女）らはいずれ

ものちの調査において重要なインフォーマントとなる面々である。とくに二谷国松はアイヌの儀礼や伝承に精通し、これ以前から多くの研究者たちに情報を提供してきた人物の一人である。1950年3月には、東京都北多摩郡保谷町（現・西東京市）の財団法人日本民族学協会附属民族学博物館の敷地内に伝統的なアイヌ家屋を弟の二谷一太郎、二谷善之助とともに建設、同月25日の落成式も執り行っている<sup>(28)</sup>。沙流川流域のイウォロとコタンの領域や機能、また父系の血縁者がイトッパを、母系の血縁者がウッソロを同じくすること、そして男は母親と同じウッソロを持つ女と結婚できないことなど、8月の本調査のテーマとなる事柄の基礎的情報については、30日の最初の国松からの聞き取りの段階で、しかも相当に整理された形でほぼ出揃っていることが注目される。

翌2日早朝、泉夫妻は平取を発って札幌へ向かった。平取村での調査は実質4日間であった。札幌では高倉とまた面会するが、このときは10時40分から15時20分まで待たされ16時には駅に行って急行に乗ったとあるので、打ち合わせはごく短時間であったようだ。途中青森で映画を観て、4日の7時25分に上野へ帰着した。

高倉と名取から直接の情報提供を受けていたとはいえ、泉が調査対象地とのファーストコンタクトにおいては彼ら「北海道諸学者」（あるいは久保寺のような在京の「ミンゾク学者」）の仲介などに依らず彼自身の個人的なネットワークを活用していた、という事実は銘記されておいて然るべきであろう。そして、そのことを踏まえれば尚のこと、二谷文次郎、そして二谷国松という「ネイティブ・インフォーマント」の果たした役割の大きさによってその後の「総合調査」が方向付けられたということが一層浮き彫りになるのである。

## 2) 十勝調査（1953年8～9月）

泉靖一がアイヌを対象としたフィールドワークに関する自身の「挫折」体験を述べていたこ

とは、この学問領域を業とする人々の間でよく知られている。その「挫折」とは、次のようなものである。

(前略) 北海道の十勝太にあるカラフト・アイヌ系の老女を訪ねて、カラフト・アイヌについて私のもっている学問上の疑問をただそうとした。そのとき彼女は大声で私をどなりつけた。

——おめたちは、カラフト・アイヌがどんな苦勞をしているか、どんな貧乏をしているか、それなのにこのこ、こんなところまで出掛けてきて、おれたちの恥をさらすきか？ それとも、おれたちをだしにして金をもうけるきか、博士さまになるきか!!

私は雷光に打たれたよりも激しい衝撃を受け、ただあやまって調査をせずに帰ってきた。それくらい、アイヌ系の人びとにあうことが苦痛だし、フィールド・ワークを試みようとしてもしない。こんな考え方は、フィールド・ワーカーとしては不適當で、もっと説得し、もっと執念をもって、苦しくてもあきらめてはいけないのかもしれない。ところが、私にはそれができないのである<sup>(29)</sup>。

「主体と客体がはっきりしていなければならぬ学問の世界に、人間関係がどうしてももちこまれてしまう」ゆえに文化人類学者のフィールドワークには「つねに苦痛がともなう」、と考えるきっかけになったというこの「事件」を、泉は「総合調査」の後半に起こったこととしている<sup>(30)</sup>。

筆者は大学院生時代の1997年に発表した最初の論文のなかで、このエピソードへの言及に続けて、泉が「アイヌと接するのが苦痛となり、フィールド調査を断念し」「その後ブラジル移民調査などを経て南米先史学に「転向」した泉は、アイヌの「現在」から一切手を引いたと述べたことがある<sup>(31)</sup>。これに対して、同論文が出版されてまもなく、筆者は「総合調査」の若手参加メンバーの1人であった故・祖

父江孝男氏から私信をいただき、「事実と反している点がある」との指摘を受けた。泉がユネスコの共同調査プロジェクト「社会的緊張の研究」のメンバーに推薦されブラジル日系人社会の調査に出たのは1952年9月であり、確かに筆者の論述では時系列的な前後関係が混乱している。が、むしろ祖父江の指摘で重要だったのは、そもそもアイヌ調査の「挫折」が泉を南米に向かわせたのではない、という点である。1953年5月に帰国した泉は、8月に北海道大学で開催された「第8回日本人類学会・日本民族学協会連合大会」に参加し、その終了後、前述したように杉浦とともに十勝への調査に赴いたのであるが(当時院生だった祖父江もこれに同伴した)、件のエピソードはこのときに起こった。祖父江は以下のように回想する。

泉さんは1953年に帰国したのですが、アイヌにどなられたのはこの年の夏の事で、泉さんと私の二人で、ある樺太アイヌのおじいさんから話を聞いていたところ、たまたま訪れていた隣家の40代の威勢のよいおばさんからどなられ、おじいさんもひるんで奥へひっこんでしまったという次第だったのですが、その当時、泉さんはこの出来事に大きなショックを受けたという風もありませんでした<sup>(32)</sup>。

この祖父江の証言が概ね正しいことが、前述した国立民族学博物館所蔵の泉靖一アーカイブから資料的に裏付けられた。この十勝調査の際に書かれた泉のフィールドノートには、その一件の顛末が書き留められている<sup>(33)</sup>。8月29日の記述。

朝食をすませると、火事がおきた。祖父江君とかけつけて消火につとめる。男が全部浜に行っていたために、かけつけた人は女と老人のみ。樺太の人の話を聞ふと(中略)おばあさんのところにゆく。話を聞いていよいよ要点の母系の問題にふれていると一人のアイ

ヌ女性が大声でどなりこみ「戦争に負けたのに、何故戦争に負けた自分たちをアイヌとして調査するか」「自分らはよいが子供たちが差別をうけることをどうしてくれる」「何故スピーカーで土人と云った。歌など放送して、アイヌの祖先のごうをさらすのだ」「何故アイヌが胴が長いなどと、つまらぬことを云って、シャモと差別するか」「何故つまらぬことをしらべて金もうけするや」…「どうして調査するならば、もっと有益な生活の為になるような調査をしないか」立つづけにまくし立てられる。お婆さんはこそこそと引きこんで、針をつかいはじめ、白々しい空気が流れる。××さんと二人で色々説明したがどうにもならず、調査を打ち切って〇〇さんの家に帰り昼食をすまして、祖父江君が迎えに行くと不在、あきらめていると××氏来り、仕方ないと…なげく。ところがひょっこり婆さんがやって来る。余りアネチャの剣幕がひどいので畑に出て、来たと云ふ。それから話はすらすらとはこぶ。しかし話は親族の問題に限定されて、Iworなどの経済生活とは結びつかない。

※××、〇〇の人名は引用者による伏せ字

実際に話を聞いていた相手は「おじいさん」ではなく「おばあさん」であったことがわかる（この点は泉の記述の方が正しい）が、祖父江が回想している通り、ここから泉がショックを受けてへこたれているような様子は全く見られない。彼はその後も調査を継続し、社会組織に関して得られた知見をまとめる気概を維持していたはずなのだ<sup>(34)</sup>。

では、泉は「ウソ」をついていたのか。おそらくそうではない。確かに泉は、最後にはそれを「苦痛」と感じるほどの「挫折」をアイヌ調査において味わっていたはずなのだ。ただし、そのように推測させるのは、上述の1953年（つまり、泉のいう「総合調査」の後半）ではなく、まったく別の時期の調査に関する記録からうかがい知られる事実によってである。泉は後

年になってから自身のアイヌ調査を回顧するなかで、複数の記憶を（意識的にせよ無意識的にせよ）混同して語っている可能性がある<sup>(35)</sup>。

### 3) 「アイヌの国を訪ねて」(1959年7~9月)

現在ではその存在がほぼ語られなくなってしまった、泉によるもう一つのアイヌ調査がある。

二メートルもある朝鮮ギクの、毒々しい黄色の花の下をくぐって、坂道をのぼりつめ、一歩足をふみ入れた瞬間、コタンの空気が、ガラリと変わった。立話していた娘さんが、さっと家の中に走りこむ、泥だらけになって、ママゴト遊びをしていた子供たちを、母親がカン高い声で呼びつける。

真暗な部屋の中から、敵意をむき出しにした白い目が光る。調査団の動きを、鋭い視線が追ってくる。老婆にカメラを向けると“モデル料出せ”と右手をつき出された。

(中略)

ますますゆたかになる少数の人とさらに苦しくなるものと、同じアイヌ系が二つに分裂する傾向は、全道に共通する現象だ。どこでもおこることだし、それは能力の違いだ、といってしまうばそれまでのことだ。しかし一部の指導者をのぞきアイヌ系の多くがろくに教育もうけていない。二重の責苦にしいたげられながら急速に、固有の文化、伝統は失われてゆく。現代アイヌのそんな痛ましい姿がこのアイヌ・ロードにはなまなましくぎざまられていた。

1959年8月17日から9月7日にかけて毎日新聞に18回連載された「アイヌの国を訪ねて」のなかの、第10回「アイヌ・ロード—伝統を残したコタンの集まり—」の一節である。取材地は、かつて「沙流アイヌ共同調査」の対象にもなった集落の一つ、貫気別。紙面の見出しは、「ここにも貧富の差 敵意こめた悲しい目—」である。「痛ましい姿」として描かれている現実が何によってもたらされてきたのか。そ

れを問うことは同時に（かつてではない、いま・ここで）「白い目」の「敵意」が何に対して向けられているのかについて反省的に捉え返すことでもあるのだが、暗い色調の底に哀愁とロマンティズムが漂う文体で貫かれた筆致はどこまでも第三者的で、ときに冷笑的と映る場面も少なくない。

実はこの連載は、泉を中心とした「アイヌ学術調査団」が札幌で借りたジープで北海道一円を回る50日間の旅を追って書かれたものである<sup>(36)</sup>。ジープには毎日新聞社の社旗が付いていた。記事は「調査団」に随行した取材の形を取っているが、当時決して潤沢ではなかった調査費を捻出するためのタイアップであったものと推察される。

この連載は、同じ年に「皇太子妃取材班」のメンバーを務め名文家として鳴らした藤野好太郎記者<sup>(37)</sup>の署名記事であり、泉が直接書いたものではない。しかし、随行取材の形をとったものである以上、藤野とやりとりする過程で泉たち「調査団」から発せられた言葉が随所に反映しているであろうし、学的なテーマに関わる内容については尚更そうであると見るのが自然である。

「東大文化人類学研究室泉靖一助教授ほか三氏」の「アイヌ学術調査団きょう出発」を報じた同紙7月28日付記事のなかで、泉は、「これまでアイヌについては金田一先生のユーカラの研究をはじめ沢山の学者によって調査、研究されているが、残念ながらアイヌを全体の姿でとらえたものはなかった。」「またイオルやウプソルのこともその後全く研究されていない。——できるだけたくさんのコタンをまわり調査してみたい」と抱負を述べている。このときもなお泉は、「アイヌ民族総合調査」で果たせなかったアイヌ「固有」の社会組織の解明を諦めてはいなかったのだ。

連載の最終回「さようなら」は、そうした「調査」の「成果」にも言及している。しかし、泉が知りたかったというウッソロつまり母系組織についても、コタンやイウォロの構造に

ついても、それ以前の「総合調査」を超える新たな発見はほとんど何もなかったと言ってよい。やや長いが、以下に全文を引用する。この回の見出しは、「しあわせよ、早く— 偏見も劣等感も彼方へ」である。

道東、白糠の町を、アイヌこじきが歩いていた。軍隊服にアカじみた外被、うすい背中に全財産をつめこんだリュックが、軽くゆれている。酒屋から隣りの雑貨屋へ、親指の出た地下タビはよろめいて、年はもう七十才は越しているだろう。

写真をとられていることに気づいたらしい。さっと道ばたにかがみこみ、ふり返って、カメラマンをにらみつけた。両手には大きな石が——。

財布をとり出すと、敵意をむき出しにした老アイヌの姿勢が、とたんに、ゆるんだ。「モデルだろ、どんな格好すればいいんだ」そして酒くさい息をはきながら、身の上を語った。

日高のあるコタンにいたが、子供がなく、二年前妻が死んだ。「女のいない家は、おしまいだ。この年で働けやしないし……」一杯のしょうちゅうのためにアイヌを売り物に町をさまよっているという。

亭主は日雇いかデメンとり。かせぎをすべて酒にかえて、成人した息子は“アイヌ”と呼ばれぬ本州にあこがれ、だまって家を出てゆく。残された数人の子供とまずしい家計、その一切が母親の肩に、のしかかる——そんな風景を名寄で、釧路で、根室、旭川で、何度となく目にし、耳に聞いた。

一家をささえるものは母親であり、主婦が亡くなった家はバラバラになる。かつては主婦が死ぬと家を焼き、子供はそれぞれ親類に預けられ、一家を解体してしまう習慣さえあった。

その象徴がこんどの調査目的の一つ、マツト・ウプソルである。オヒョウの皮などで編んだこの腹帯は、亭主にも見せられぬ秘めご

ととして母から娘へ、娘から孫娘へと、ひそかにうけつがれた。“母と同じマツト・ウブソルをもつ女とは結婚できぬ”というタブーになって男をしぼり、母親中心の生活の仕方をも、伝え続けたのである。

この伝統は和人との急速な混血でほとんど失われた。静内町のイ・オ・マンテで、いまだにマツト・ウブソルをもつ四人の主婦に会えたが、ウブソルを見たこともない人が多かった。ウブソルは消えた。けれどそれが意味する母系氏族的な集団の伝統は、いまだに生きている。

マツト・ウブソルとならんで、アイヌ・モシリ（国）を支えるものにイオル（領域）がある。アマポ（仕掛弓）をおく山の狩場、ウライ（仕掛ヤナ）をかける川の狩場など、イオルは狩猟民族であったアイヌ社会の生命を握るカギであった。こんどの調査で、これは全道にあったことが明らかになった。

ただ、十勝アイヌのイオルは、コタンにまで細分された日高アイヌのそれよりずっと大きく、釧路、根室アイヌは、さらに大きな範囲にわたり、北へ行くにしたがってルーズになっていた。

イオルもまた消滅したが、現在の日高の郡境、十勝国などの行政区画や、地先漁業権、干浜の区分になって残っている。

アイヌ・モシリはいくつかのイオルによって構成され、そのにない手は父方の関係によって結ばれたコタンであり、イトクパ（家紋）によって、男から男へうけつがれた。家族の中心がウブソルによって、女から女へ伝えられたように。

アイヌ固有の文化は今日、そのすべてが破壊された。しかし、それが現在のアイヌにとって不幸だといえるだろうか。半世紀近くの生涯をアイヌにささげた帯広の吉田巖氏は、こういう。「アイヌの本当のしあわせは、アイヌでなくなることです」

五十日、四千五百キロを越す全道調査の終りに、旭川嵐山にあるウラシチセ（ササ小

屋）を訪れた。しんしんと静まりかえるこの一角で、門野ハウトムテイさん（六七）と妻トサ子さん（六〇）の夫婦が、孫をはさんで、楽しく語り合っていた。長いアゴヒゲ、くぼんだ眼窩（か）、まつ毛の濃い鋭い目。アイヌの特徴を除けば、この二人の姿は生涯の労苦をわかち合った日本人老夫婦と、何の変わりもなかった。「出てゆけ」と叫んだトツカリシヨ浜の老婆、貫気別コタンの白い目、イ・オ・マンテの後のみにくい争い……調査行で体験したいまわしいことが、すべて幻影にすぎないような気がした。みんな、しあわせになってもらいたい。偏見も劣等感もない社会になるように。そう祈らずにはいられなかった。

「消えた」ウブソルに象徴される「母系氏族的な集団の伝統」が「いまだに生きている」、その証左は、男たちが出て行ったあとの貧しい家を支える母親の姿に見られるような「母親中心の生活の仕方」だ、そしてまたイウォロも、現在の「郡境」や「行政区画」や…、云々。社会の構造とその歴史的と変容の因果関係を論理的に問うという「総合調査」が目指した視座は、もはや残念ながらまったくうかがい知れない。

この頃すでに南米アンデスで先史的な研究に着手しつつあった泉は、このときの調査でも十勝郡浦幌町の下頃<sup>したころべ</sup>辺で住居跡を発見するなど、北海道の再開発に伴って破壊されつつある遺跡にも関心を寄せていた。アンデス発掘調査のトレーニングという意味付けも加わって、北海道についても考古学的なテーマの方に興味の重心をシフトさせていったのだろう。そして同年秋には、中世・近世のアイヌ文化期に先立つオホーツク文化を通じて北海道と樺太以北の北方地域との文化的な関係を探求するため、宗谷のオンコロマナイ遺跡の発掘調査を行った。

この8年後に刊行されたオンコロマナイ遺跡の調査報告書の序文では、同時代のアイヌの現状について以下のように述べられている。

アイヌの民族誌学的研究つまり伝統的文化的復元をめざすような研究に寄与しうる、アイヌの集団または報告者は、残念ながらほとんど存在していない。ただ、言語だけに限るならば、わずかに数名の報告者はいるけれども、彼らも遠からず人間の運命にしたがうことになるであろう。しかし、人種的集団としてのアイヌ社会は、地方によっては和人社と複合して存在し、両者のあいだに、差別意識や対立意識が存在していることはいなめない事実であった。このようなアイヌの人種的集団にたいする社会人類学的研究は、ごくわずかなされされていないので、今後私たちにあたえられた、大きな課題であることを、痛感せざるをえなかった<sup>(38)</sup>。

夏の調査行の出発当初に語られた「アイヌを全体の姿でとらえ」という企図こそが、まさしくここで言われているような「ごくわずかなされされていない」「大きな課題」だったはずである。泉にとってそのような文化人類学的なフィールドワークが真に「挫折」したのは、このときなのであった<sup>(39)</sup>。かくして、回想などで遡及的に語られる1959年夏の「成果」は、あくまでも遺跡発掘のための予備的なものとして過小に見積もられることとなる。彼はさらにのちに、オホーツク文化のような「北につらなる文化」に興味を覚えた理由を、「シベリアとアリューシャン列島ならびにアラスカをむすぶ極北の回廊にたいするノスタルジアがひそんでいたから」と振り返っている<sup>(40)</sup>。だが、こうしたロマンティシズムは、「固有」のアイヌ社会の「消滅」に向けられた感傷性とも実は通底していると言うべきであろう。

#### 4. 結びに代えて

少なくとも活字上において、アイヌ研究をめぐる泉の「挫折」の回想が発せられるのは、1960年代後半になってからのことである。

この時期は、文化人類学を学ぶ学生・院生の間でも大学紛争の影響が色濃く見られるように

なっていた頃である。当時はアメリカの人類学界でも、例えばベトナム戦争と人類学者との関わりなどをめぐって研究倫理に関する議論がなされていた。日本においてそうした議論の契機となったのは、1968年9月に東京と京都で開催される「第8回国際人類学・民族学会議」の前後に計画されていた北海道白老町でのエクスカーションであった。ツアーを担当する旅行会社が前年に作成した英文ガイドブックは、アイヌを孤立した伝統的慣習に生きる集団として描いていた。のちに東京大学文化人類学研究室における全共闘運動で中核を担うことになる清水昭俊は、当時同じく東大文化人類学の大学院に在籍していたアイヌ研究者の河野本道の紹介で、1968年の春先に静内での短期調査を経験していた。その帰京後、清水は河野と相談し、組織委員会北海道小委員会に批判文を送っている<sup>(41)</sup>。

その後、大林太良助教授が院生たちと組織していた東南アジア研究会が不定期に刊行する『東南アジアの民族と文化』に、清水は「人類学的調査についてのノート」を書いた。彼はその注のなかで、アイヌ調査の経験を踏まえ以下のように論じている。

私はここがアイヌ系住人の部落だからというよりは、北海道の農村の生業や、人種的出自を異にする人々の構成する集団の性格等を知りたくて行ったのだが、アイヌ系の人々はどうしても私がアイヌ研究にやって来たとしか受け取ってくれなかった。彼等にとっては、やってくる和人の学者は全てアイヌ研究者なのだ。そして彼等はアイヌ研究者を、アイヌと和人という歴史的対立の中に位置づけているようだった。即ち彼等の説明によれば、アイヌが和人に敗けたのは、アイヌが文字を知らなかったからである。和人は文字を知っているから、アイヌから財産を盗み取ることができた。こうしてアイヌの文化は敗れ、滅びる運命にある。それを、滅ぼした当の和人が、文字の形にして記録し、後世に伝

えている。云々。アイヌ研究者は彼等の意識の中でもアイヌ差別の一環として受け取られている。更に調査を困難にするのは次のような事情である。差別に苦しめられて来たアイヌ系住民のとりえた殆んど唯一の対処策は和入への形質的文化的同化であった。外見からも、一所に暮してもアイヌ系の人だと分らなくなることで、これが彼等の念願である。ということは、彼等はアイヌ系住民ではありたくない、何故ならば、差別が行なわれるのは全て自分等がアイヌ系だから、ということである。彼等には、彼等がアイヌ系であると指摘されることすら苦痛になっている。これに対して、アイヌ研究は相手がアイヌ系住民だから行なわれる。彼等にとってはアイヌ研究者がやって来ることすら差別の現れなのであり、苦痛なのである。人種その他の差別のある所では、そして人類学者が差別する側に identify される限りは、同じ困難が待ち受けていよう。このような所では、差別をしないで調査することは至難の業であろうし、調査には余程慎重にとり組まねばならぬであろう<sup>(42)</sup>。

その後の日本万国博覧会への協力反対、さらには国立民族学博物館構想への反対へと連続する文化人類学界での全共闘運動について、云々するだけの紙幅は尽きた。清水の論文は、日本の人類学者が人類学的調査や民族誌記述について植民地支配との関係から批判的に論じたものとしては最も先駆的な例と言えるが、こうした考察を導いたものの一つがアイヌ調査の経験であった、ということだけをここでは確認しておこう。泉が例のアイヌ研究における「挫折」のエピソードを語り出すのは、彼が「最悪の」と振り返った1968年におけるそのような背景と無縁ではなかったと思われる<sup>(43)</sup>。そしておそらくは、1959年の「いまわしい」調査がほとんど人々の口の端に上らなくなってしまったことも、泉自身が錯誤して語った「挫折」譚が流布されたことと関連しているに違いない。

## 注

- (1) 杉浦健一「沙流アイヌの親族組織」(『民族学研究』16巻3・4号、1952年3月、p.3-28)、泉靖一「沙流アイヌの地縁集団におけるIWOR」(『民族学研究』16巻3・4号、1952年3月、p.29-45)。
- (2) 「アイヌ民族総合調査の計画」(『民族学研究』15巻1号、1950年8月、p.34)。
- (3) 「アイヌ民族総合調査の経過」(『民族学研究』16巻2号、1951年11月、p.93)。
- (4) 泉靖一『遙かな山々』(『泉靖一著作集 7 文化人類学の眼』読売新聞社、1972年12月[原著は『遙かな山やま』新潮社、1971年11月]、p.159-383) p.307。
- (5) 石田英一郎「沙流アイヌの共同調査報告について」(『民族学研究』16巻3・4号、1952年3月、p.2)。
- (6) 須田昭義「沙流アイヌの身体諸形質の調査資料について」(『民族学研究』16巻3・4号、1952年3月、p.82)。なお、このとき作成された「沙流川アイヌの系圖」は謄写印刷され、実費100円・郵送料16円で日本民族学協会から希望者に頒布された。現在では個人情報保護の観点から、その活用に際して十分な配慮を要する資料である。
- (7) 石田前掲論文。
- (8) 泉前掲論文、杉浦前掲論文、および瀬川清子「沙流アイヌ婦人のUPSHORについて」(『民族学研究』16巻3・4号、1952年3月、p.62-70)、渡辺仁「沙流アイヌにおける天然資源の利用」(同 p.71-82)。瀬川は8月の「沙流アイヌ共同調査」に加わって聞き書きを行い、『アイヌの婚姻』(未来社、1972年3月)はその後の調査成果も併せた集大成とも言える文献であるが、杉浦が行ったような社会人類学的な理論枠と関連づけた考察とは性格を異にする。また渡辺は、その後に生態人類学の立場から精緻な統合性を伴った機能論的なアイヌ社会像を提示している(Hitoshi Watanabe, *The Ainu Ecosystem: Environment and Group Structure*. University of Tokyo Press, 1972.)。これら諸研究と「総合調査」との関連については、改めて検討する機会を持ちたい。なお、アイヌ語表記についてはカナ、ローマ字とも近年普及している表記法に従った。
- (9) 例えば、帝国学士院東亜諸民族調査室(編)『東亜民族要誌資料 第二輯 アイヌ』帝国学士院、1944年3月、p.54-55(この部分の執筆者は高倉新一郎)、名取武光『噴火湾アイヌの捕鯨』北方文化出版社、1945年12月、p.114。また名取の関連論文として、「削箸・祖印・祖系・祖元及び主神祈り見たる沙流川筋のアイヌ」「沙流川筋アイヌの家紋と婚姻」「アイヌの貞操帯」(いずれも『アイヌと考古学(二) 名取武光著作集II』北海道出版企画センター、1974年1月、に収録されている)、など。
- (10) 祖父江孝男「杉浦健一—ミクロネシア研究の泰斗—」(綾部恒雄(編著)『文化人類学群像 3日本編』

- アカデミア出版会、1988年12月、p.333-351）  
p.348。このような出自体系は「平行出自（parallel descent）」と呼ばれることがある。Kenichi Sugiura & Harumi Befu, “Kinship Organization of the Saru Ainu”, (*Ethnology*, Vol.1 No.3, Jul. 1962, p.287-298) p.296.
- (11) 杉浦前掲論文、p.17。
- (12) 新聞でも「アイヌの社会構造“世界にも珍しい”と折紙」（『朝日新聞』1951年9月3日付記事）、「古代アイヌにも母系氏族 杉浦教授の新学説」（『北海道新聞』1953年4月23日付記事）といった見出しで報道された。なお、これらの研究に先立つ1930年代には、二風谷に居を構えコタンの人々の医療に従事しながらロックフェラー財団からの研究助成（この獲得にはチャールズ・G・セリグマンの助力があった）によってアイヌ研究を行ったニール・ゴードン・マンローが、ウッソロと外婚規制との関係にも気付き調査を行っている。マンローは母系とトーテムズムとの関連を仮説として立てていたようである。この頃のマンローの研究は、1938年頃までに未完ながら書物となるべき形でセリグマン宛に送付されたが、それが出版されたのはマンローの死後20年経った1962年のことである（Neil Gordon Munro, *Ainu Creed and Cult*. Kegan Paul, 1962.）。この本は、チャールズの妻で人類学者のブレンダ・Z・セリグマンが編集したもので、社会組織に関する章はマンローが残した覚書などのほか、杉浦前掲論文や泉前掲論文の内容も踏まえて書かれている。
- (13) 泉靖一「故杉浦健一教授と人類学・民族学」（『民族学研究』18巻3号、1954年7月、p.72-78）。
- (14) 日本人類学会・日本民族学協会連合大会（編・発行）『日本人類学会・日本民族学協会連合大会第8回紀事』、1955年7月。杉浦はこのときの速記録に目を通す前に死去したため、泉が2種類の講演用粗稿を参考に速記録の校訂を行っている。速記原本と2つの粗稿は、後述する国立民族学博物館所蔵の泉靖一アーカイブに含まれている（同アーカイブ番号182・183・186）。
- (15) 蒲生正男は、杉浦がアイヌ社会の説明に苦慮しつつも「dual descent」という新たな概念を導入しようとしていたのを生前の本人から直接聞いていた、と後年になってから述べている。日本民族学会（編）『日本民族学の回顧と展望』財団法人民族学振興会、1966年3月、p.40。
- (16) 清水昭俊「文化人類学とアイヌ民族総合調査—戦後期人類学の展開、その一—」（<http://shmz.seesaa.net/> [2009年10月4日版]）p.43。
- (17) 杉浦前掲論文、p.17。
- (18) 奥田統己「アイヌ史研究とアイヌ語—とくに「イオル」をめぐる—」（北海道・東北史研究会（編）『札幌シンポジウム「北からの日本史」場所請負制とアイヌ—近世蝦夷地史の構築をめざして—』北海道出版企画センター、1998年12月。p.236-261）
- は、イウォロが社会的区画を含意することを前提にした議論がほぼ泉前掲論文を典拠としていることについて指摘し、そこでの仮説の正当性に留保をつけていた泉が提示したイウォロの概念を無批判に他の議論へと援用することについて、アイヌ語研究の立場から警鐘を鳴らしている。こうしたなかで、口承文芸の分析を通じてイトコ婚規制の問題を考察した本田優子「金成マツの英雄叙事詩にみられるイトコ婚」（『比較文化論叢 札幌大学文化学部紀要』18、2006年9月、p.19-40）は、仮説的な検証であるものの注目に値する。これらの問題に関する考察は、「総合調査」においてデータや理論が組み立てられていく過程についての（フィールドノートの解説などを通じた）検討と併せ、後日を期したい。
- (19) ただし「沙流アイヌ共同調査報告」には、「北海道諸学者」のうちに含まれると見られる土佐林義雄「アイヌ民族の墓標」（『民族学研究』16巻3・4号、1952年3月、p.102-115）と吉田巖「古川コサンケン翁談叢」（同p.116-126）が掲載されているが、これらは「共同調査」の研究成果とは独立に寄稿されたものである。
- (20) 清水前掲論文、p.42-44。
- (21) 久保寺逸彦「沙流アイヌの祖霊祭祀」（『民族学研究』16巻3・4号、1952年3月、p.46-61）。石田前掲論文によれば、久保寺は8月の「沙流アイヌ共同調査」の際にグループで「組織的調査」を行っていた泉・杉浦・瀬川清子・石田・岡の5名とは「別に行をともにして祭祀および口承文芸の研究を分担」し「言語や宗教儀礼などとの関連において」「アイヌに本来的な地縁的・血縁的な社会構造」の解明に多大な協力をなした、とある。それまでの学会報告などで統一性を欠いていたアイヌ語ローマ字表記を「沙流アイヌ共同調査報告」において校訂したのも久保寺である。論文では男女両系統から成る親族組織と祖霊祭祀との関連についても言及しているが、石田の目に映じた久保寺は、あくまでも理論研究に対する「協力」者に過ぎない。
- (22) 同アーカイブ番号169・172・173。なお、2014年12月現在、泉靖一アーカイブは正式な公開資料とされていないが閲覧は可能である。他のアーカイブと同様に公開に必要な整理番号がすでに付された状態となっており、2014年度中には必要な手続きが完了する見込みである。閲覧に際しては、同館の齋藤玲子助教と久保正敏教授のご助力を得た。記して謝意を表したい。
- (23) 注（9）参照。
- (24) 泉前掲論文、p.30。
- (25) いまも同地には、麟太郎の功績を記念する碑や銅像が建ち、泉家の旧宅を利用した「泉記念館」が設けられている。
- (26) 二谷文次郎については、平取の「自治開発に協力した人々」の一人として、平取村開村五十周年史編纂委員会（編）『平取村開村五十年史』平取村役場、

- 1952年10月、p.204に紹介されている。泉の調査当時は役場前に事務所を構え代書業を営んでいた。
- (27) このうち鍋澤トヨ(1889-1966)について、泉ノートには彼女が「Shiunkotsu」(現・平取町紫雲古津)の人であること、「占いをする」人で「口のみ入墨をしていること」、自分が嫁に行くときには父母が自分にウツソロを持たせないことにして父が火の神に祈ったこと、などが記されている。筆者は彼女について、1930年代に紫雲古津から平取に移り住み法華経と混淆したトゥス(巫術)を行っていたことなどについて述べたことがある。拙稿「記憶の場」のエージェント「アイヌ研究住職」と人文神オキクルミの〈昭和史〉(坂野徹・愼蒼健(編)『帝国の視角/死角—(昭和期)日本の地とメディア—』青弓社、2010年12月、p.243-280)。
- (28) 知里真志保「アイヌ住居に関する若干の考察」(『民族学研究』14巻4号、1950年5月、p.74-77)。宮本馨太郎「アイヌ住家の建設について」(同p.77-78)。「1949年度事業報告」(同p.79-81)。式には渋谷敬三、金田一京助、ジョン・ベネット、ハーバート・バッシンらのほか、翌年のアイヌ調査メンバーとなる岡、石田、杉浦、鈴木が出席しているが、泉はいない。
- (29) 泉靖一『フィールドワークの記録—文化人類学の実践—』講談社現代新書、1969年5月、p.4-5。
- (30) 泉前掲書『遥かな山々』p.308。
- (31) 木名瀬高嗣「表象と政治性—アイヌをめぐる文化人類学的言説に関する素描—」(『民族学研究』62巻1号、1997年6月、p.1-21)p.11
- (32) 1997年10月22日付の私信から引用。
- (33) 同アーカイブ番号174。表紙には『十勝紀行I 1953.8.25-9.2』と書かれている。
- (34) 泉アーカイブ190には、「アイヌの社会組織とその崩壊」と題された1枚の紙(タイプ印刷)が含まれている。日付は「昭和二八・一二・四」となっており、おそらくは著書の構成案であったものと思われる。「従来のアイヌ研究」「血縁組織」「地縁組織」「アイヌの系統」「アイヌの社会組織の崩壊」の5章から成るものが計画されていたようだ。
- (35) 例えば、泉前掲書『フィールドワークの記録』ではこのエピソードを1949(昭和24)年のことと記しているが、無論これは誤りである。泉の書き記す年代など細かな事実関係の記憶にはそもそも大雑把なところがある、ということをあらかじめ踏まえて読まねばならない。藤本英夫『泉靖一伝—アンデスから済州島へ—』平凡社、1994年11月、p.59。
- (36) 新聞上のアイヌ関連記事をリストアップした社団法人北海道ウタリ協会アイヌ史編集委員会(編)『アイヌ史 資料編4 近現代史料(2)』(北海道出版企画センター、1989年5月)所収の「新聞記事表題目録」には、この連載についての記載が欠落している。
- (37) 『銀座一丁目新聞』No.353(2007年3月10日号)
- 「追悼録(269) 名文記者・藤野好太郎君を偲ぶ」  
<http://ginnews.whoselab.com/070310/tsuido.htm>  
 (2014年12月16日閲覧)。
- (38) 泉靖一・曾野寿彦(編)『人文科学科紀要第42輯 文化人類学研究報告1 オンコロマナイ』東京大学教養学部人文科学科文化人類学研究室編・東京大学出版会刊、1967年7月、p.1。
- (39) その後、泉は1962年7月のオンコロマナイ遺跡の再発掘の前に静内町(現・新ひだか町)で葬制の調査を、1967年12月から68年2月までアイヌ絵の調査を行っているが、いずれもそれまでの社会組織に関するテーマとは異なるものである。
- (40) 泉前掲書『遥かな山々』p.348。
- (41) 清水昭俊『これまでの仕事、これからの仕事—「最終講義」増補版—』(私家版2006年5月)p.26。同書は清水が一橋大学退職時に行った最終講義を元にして刊行したもの。
- (42) 清水昭俊「人類学的調査についてのノート」(『東南アジアの民族と文化』2、東京大学文化人類学研究室、p.49-64、1968年5月)p.60-61。ここで引用した注は、清水前掲書p.24-25にも再掲されている。過去の人類学に対する批判的な問題意識だけでなく、ここでの「アイヌ差別」の捉え方にもまた時代状況の制約が反映していることには留意したい。
- (43) 泉前掲書『遥かな山々』p.370-383。